

| | |
|------------------|---|
| Title | 糸満の意義 |
| Sub Title | |
| Author | 宮良, 當壯(Miyanaga, Masamori) |
| Publisher | 三田史学会 |
| Publication year | 1928 |
| Jtitle | 史学 Vol.7, No.3 (1928. 11) ,p.105(417)- 116(428) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19281100-0105 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

糸 滿 の 意 義

一

大正十四年の夏私は帝國學士院の補助を受けて、琉球諸島に言語調査に行く時、便船の都合で、一二日鹿兒島市に滯在することになった。そこで縣廳の永井龍一氏に案内されて、市の東に在る知事官邸を訪れることになった。その當時の知事は縣忍氏で、吾々の話は遇々糸滿と云ふ名稱の意義にまで及んだ。縣氏は、或人の話によると、糸滿人は一般の沖繩人と人種が違ひ、即ち白人の流れで、そして其イトマンと云ふ名稱も、ホワイト・マン (white-man) の「ホワ」が落ちて、「イトマン」になつたのだと云ふが、如何ですか、と云ふ質問であつた。これに對して私は、大體次の如く答へたやうに覚えてゐる。即ち糸滿の男子は他の沖繩の男子に比して、一體に鼻が高く、皮膚は赤銅色で、毛は赤く、そして腰から下の發達が餘り良くない。又女子は胸を充分に張つて頗る姿勢が佳い。全體から觀ると、氣象が荒く、迷信の觀念が強い。かう云ふ體質や性格からして或は之を西洋人の血を引ける者であるとし、殊に佛蘭

西の汽船が難破して其海岸に漂着したと云ふことがあるために、其子孫が永く此地に留つて繁榮したと云ふ話を聞いたことがある。けれども糸満と云ふ名稱に關しては未だ明確なる解釋を得てゐない。

此外に、糸満は獨逸人イートマン氏の末裔であると云ふ説を何かで讀んだことがある。

沖繩の古い童謡には、ティンカラ、ウティタル、イチュマン・グワードと云ふのがあつて、糸満人を天から落ちて來たやうに考へてゐる。併しながらこれは糸満人が必らずしも異人種であると云ふことにはなるまいと思ふ。

一

それ以來、私は二回も糸満町へ行つて、その言語を調査するかたはら、糸満と云ふ名稱の意義に就いて、土地の古老達に色々と尋ねて見た。その結果はかうであつた。——この土地で一番古く掘つた井戸は白銀堂（俗稱イビ・ヌ・マー、神の前即ち御神様の義）の前に在るシリン・カー（釣瓶井戸或は尻の井戸の義かと云ふ）一名シリン・シン・ガード（尻の釣瓶井戸の義かと云ふ）であつて、この井戸を掘つた時に、水の湧き出る穴から、アジカート云ふ一匹の大きな蟹がイトウ・マン（ith-man）即ち絹糸を衝へて匍つて來たので、此井戸の在る場所を「イトウマン」と呼んだ。即ちこれが糸満の起原であると云ふ。こゝで私はもう少しイトウ・マンと云ふ言葉に就いて調べて見たい。イトウマンは又イチュマンとも云つて居り、

そしてこれは多くの地方で漁師の意味に轉用されて居る。或は丁寧にイチュマン・ツ・チュー(its'umant-tsu)、イチュマン・ビ・イトウ(its'unam-pitu)などとも云ひ、或は又卑下してイチュマナーとも云つて居る。イトウ(itu)は八重山語では糸であり、イッチュ(ittsu)は絹糸であるが、此兩語は全く同一語原のものであると思ふ。又マンは俗に山蜘蛛の口から吐き出す糸若くは之を以て作った網(巣)などを云ふのであるが、蠶をマンムシイ(mam-musi)と云ふ所から觀ると、マンは生絲の原料となるもので、國語のマユ(繭、古語マヨ)も之と全く同じ語原であらう。眉生、眞木綿などの約と云ふ説はどうかと思ふ。糸滿語のイトウとマンとも別語であると思ふが、土地の古老達は全然同じものだと云つてゐた。

右の糸滿と云ふ名義に關する説話は、思ふに名稱説明の爲に後世の人が附會して作つたものゝやうである。土を掘り、岩を打碎いて深く掘り下げられた地の底に、假に大きな蟹が生存してゐたとしても、絹糸の説明をどうするか。又絹糸即ちイトウマンを出した井戸の名稱をどうしてイトウマンガー(糸滿井戸)と云はずに、シリンカー若くはシリーンシンガーなどと呼び、そしてイトウマンを其部落の名稱として用ゐるに至つたか。その邊の事情が甚だ明瞭を缺いてゐる。

又前記ホワイトマン説やイートマン説も糸滿語を調査して見ると、思ひ半に過ぐるものがある。

三

そこで糸満語が琉球語系に屬するものであることを證明するために、聊かその言語を提示したいと思ふ。

世が移り變るに従つて吾々の身邊の調度は色々と便利な美しいものに變つて行く。居ながらにして西洋の樹果を喫することも出來れば、南洋の花卉を愛翫することも出來る。それと共に又、吾々の言葉には絶えず新しいものが加つて行く。時代と共に増減する性質の言葉はさて置いて、比較的變化性の乏しいものを少しばかり選んで考へて見ようと思ふ。

先づ人倫に關する語を調べて見ると、親をウヤ、子をックワー(ukwa:)と云つてゐる。ックワーはクワーを發音する時に、聲門を一旦密閉してから強く吐き出された氣息により押破られて出る音である。この語は大島の住用、伊須、喜界島、徳之島、沖永良部島、沖繩島の首里、那霸、嘉手納、名護等にも云はれてゐる。名護や與論島では平かにクワーと云つてゐる。次に父をシュー・ターと云ふ。首里・那霸の平民はスーと云ひ、沖永良部、嘉手納の平民、石垣島の士族等はシューと云つてゐる。シュー・ターのシューは統べる義、又ターは複數を表はす「達」と觀ることも出来るが、それよりも寧ろ「人」の轉義であると思ふ。これに就いては後で述べることにする。又母をアンマーと云ふ。此は喜界島、與論島、屋良、嘉手納、首里の平民、那霸などでも云ひ、名瀬、住用、伊須、加計呂麻島の儀^{ヒヨウ}、名護等では短ぐアンマ、徳之島、沖永良部島ではアマ、久高島ではアム(am)、宮古島ではアンナ、小濱島ではアンニ、黒島、

西表島の平民、鳩間島ではアブ、波照間島ではアボア(aboa)、與那國島ではアブタ、石垣島及西表島の土族はアッバ、宮古島、新城島ではンマと云ふ。是等は悉くアモ(阿母)系の語で、そしてウム(生)と云ふ意味にも考へられるが、夫よりも寧ろ童語の食物を意味する自然の發音によるものであると思ふ。

次に肢體、數量、天體等に關する語彙の中より二三種づつを取出して、之を他の場所と比較して見よう。但し數語あるものはその一種を掲げることにする。

| 糸 満 | 首 里 | 瀬 名 | 瀬 宮 | 古 八 重 山 |
|----------------------|---------------------------------------|--------------------------------------|--------------------------------------|---|
| 頭 ヅギ | シ ブ ル | チ ブ ル | チイ ブ ル | カナ マ イ イ |
| 胸 ン | ニ ン | ニ ン | ニ ム | チイ ブ リ イ |
| 膝 ヒトツ 一 フタツ | シ ン チ ー タ チ キ ツイ | チ ン シ ン チ ン シ ン | チ ブ シ ブ シ ブ シ ブ | チイ グ シイ チイ ブ シイ チイ ブ シイ |
| 雷 月 二 月 | カ ン ナ イ | カ ン ナ イ | カ ン ナ リ | カ ム ナ イ イ |

私はここで糸満語に就いて詳しく述べようとするのでないから、たゞ糸満語がよしんば音韻上の相違

はあるにしても、首里、名瀬、宮古、八重山などの言葉と同じ系統のものであると云ふことが分る位にして簡単に此項を切上げようと思ふ。

四

次に糸満人の血統を表はす姓氏、本名、通稱及び屋號等の研究よりして、糸満人が異人種でないことが云へる。これに就いては既に大正十四年十一月、十二月發行の國學院雜誌で詳細發表してあるから、こゝにはたゞ其要點を記すことにする。即ち糸満には同姓同名が甚だ多い。それ故屋號と通稱とを併せ用ゐなければ人別をすることが不可能である。戸籍も本姓本名だけでは分らないことが多い。私の研究の資料となつた二百五十一戸の中で、其三割七分弱(九十二戸)^{ウイバ}が上原と云ふ姓、二割六分強(六十六戸)が玉城^{ダマグスク}、一割七分強(四十五戸)が金城^{カナグスク}、一割一分強(三十九戸)が大城^{オーバー}で、八分弱が宮城^{ミヤグスク}(十二戸)、長嶺(四戸)、稻嶺(二戸)、西平(一戸)等を合せたものであつた。此終りの少數部民は近年の移住者であると云ふ。それ故、糸満の古くからの姓は僅かに四種であると云つてよい。この中で上原、金城の二姓は俗にニーンチュヌヤー(根人の家)と稱して糸満町草分の家とせられてゐる。そしてこれ等の家は主に名護、幸地、浦添、識名等の地方から移住して來たものであると云ふ。若しさうだとすれば、糸満人異人種説は當然裏切られることになるのである。

右の如く、言語の調査からしても、姓氏の研究からしても、糸満人がホワイトマンであると云ふことを立證するものとては未だ一も發見し得ない。勿論これは牽強附會の説であらうから絹糸説と共に論議する價値のないものであると思ふ。然ならば糸満と云ふ名稱の解釋を何處に求むべきであるか。私は何かで其の手掛りを得るようにつとめてゐた。

所で昭和二年六月、たま／＼後慶良間の座間味島を調査した時、私が今まで此島の名を「ザマミ」と思つてゐたのに對して、島の人々が「ジャマン」と稱するのを聞いて思ひ當り、ジャマンの「マン」とイトウマンの「マン」とは關係が無いだらうかと考へ始めた。即ち糸満はイトウマミの轉化したものではないか。若しさうだとすれば、そのイトウマミは又何であらうか。そこで色々と考へた。その結果イトウマン即ちイトウマミはイユ・トウイ・アマミ即ちいを・とり・あまべ(魚捕海人部)と云ふ言葉の約轉したものであらうと云ふ考へを抱くに至つた。

上代漁業を以てわが朝廷に仕へまつた海人部の名は今も尚日本沿海各地に散在して古の面影を留めてゐる。此部民が薩摩から南進して琉球諸島に發展してゐることは、奄美大島や同島の大和村と宇検村との間に在る海見嶽(一名湯灣岳)などの名稱によつても知ることが出来る。紀・續紀にも記してある。又沖

繩の開闢神話に見える女神アマミキユ（これは琉球神道記に梵字で記してある。おもんれうしにはアマミキヨ、球陽には阿摩彌姑^{アマミコ}とある）の名も此海人部と引離して考へることは出来ないものである。たゞ問題になるのはキユ、キヨ、ノであるが、これ等は同一語の音轉であつて、これを今日の言葉で云へば複數を表す「達」や「等」のやうな接尾語である。併しながら其古い形をたゞすると「人」と云ふ意味になるやうである。試みに私達、汝等と云ふ言葉に就いて各地の方言を蒐集して見るならば、その複數を表はす部分が、ケラ、ケーラ、キ、キヤ、キヤー、チャー、チヨー、チュー、シャー、サー、ツアー、タ、ター、ダ、ヂ、テー、ミー、メー、ナーナなどの如き數多い變化を見ることが出来る。こゝに一々其語と場所を擧ぐべきであるが、煩を避くるために略しておく。

右の中終りの三語を除くの外は皆同一語の音韻轉化したものであると觀ることが出来る。そして又此「ケラ」と國語の「カラ」とアイヌボックル(Ainu. Koropok-un-guru)の「タル」などとの比較及びタ行音の變化例などよりして、これら等は人の意味でないかと考へることになる。そして人がヒト、フィト(fito)、フィトウ(fitū)、ピトウ(pitū)、ピトウ(pitū)、フム、ツチュ(tts'u)、ツトウ(ttu)などと云はれる所から考へると、ヒト「人」の語根は「ト」であつて、「ト」はフ、フー、ブー、ウフ、ウブ、ウビ、ウビ、ウフイ、ウヒイ、マイ、メー、ウ、オホ、オなどが「大」の意味を有する所から推して尊稱美稱の意味の接頭語でないかと考へる。この考察よりすればアマミキユは「海人部の民」の意味に解されることになる。

次に「海底の沙が大濤のために打寄りて洲をなし、先づ初めにアーマンツァー(宿借蟹)生ず」と云ふ八重山地方の國土生成の傳説にゆかりのある寄居蟲に關する琉球諸島の方言を擧げて見ると次の如く多數である。

アマミ
アマム
アマム(amam)

アマン

アマム

アママン

アモー

アモマ

アマン・ツァー

アーマン・ツァー

アマン・ツァー

これ等を假に寄居蟲を表はすアマミ系の語と稱してあくが、これと沖繩のアーマンチュー(アマミキュー)とは切り離して考ふべきものでないと考へる。海人部民が扁舟を操つて大洋に浮び或時には無人の島に至つて、今日でもよく見るやうに、海岸の岩蔭などに宿つたことがあつたであらうと云ふことは想像に難くない。寄居蟲をアマミと呼ぶのも、かう云ふ所から起つた名稱であると思ふ。

奄美大島の地名や琉球の開闢神話及び寄居蟲等の名に見られる海人部の名が、どうして沖繩の地名に認められないことがあらうか。殊に古來琉球全島の漁業權を掌握してイトマンの名を漁夫の意味にまで用ゐさせるに至つた此部民の名に、アマミと云ふ分子の含まれてゐることは何の不思議もないことである。そこで私は糸満人を海人部の遺蘖であると斷言したいのである。

そこで、もとへ戻つて、然らば後慶良間のジャマン(座間味)と云ふ地名はどう解釋するか。此座間味の村落は現在ではモカラク、慶留間^{ケルマ}、阿嘉^{アカ}、比加^{ヒガ}、アギナシク等の諸島の奥深く、遠淺の波静かな座間味島の南岸に在るのであるが、もとはこれより東方、高さ約五百尺の大和馬^{ヤマトシマ}と稱する山の東南麓、海濱に沿つた猫額にも等しき狹小なる地に在つたのである。所がさる年の大津浪のために村落の大半を失つたので、山を越えて現在の地に居を遷したと云ふことである。その地は今ではフル・ジャマン(舊座間味)と稱して畠地になつて居る。又此島の西北方にはアマ(阿眞)と稱する小さな部落がある。小學校も無いので生徒は毎日遙々座間味まで出掛けて來て勉強して歸る。此アマの部落名稱が海人^{アマ}であつて、海人部と關係のあるものであると思ふ。そしてこれに對して親村、本村、大村などの意味でジャマンを稱したものと思はれる。従つてアマ(阿眞)はジャマン(座間味)より分村した子村と見るべきである。ジャマンを音韻の方面から解釋して見るならば、ジャ・アマミと云ふことになる。ジャは父を意味する言葉で、父を徳之島ではア・ジャ、喜界島では今日はジュー^{ヒュウ}と云ふが昔はア・ジャードと云ふ。又加計呂麻島の儀^{ヒヨウ}ではジユ、名瀬ではズと云ふ。其他シュー、スー、イザ、イヤ、イヤー、アヤ、アーヤ、アサ、アチ^チ、アッチャ……等の語がある。

以上の考證により、私はイトマン(糸満)の語原をイユ・トゥイ・アマミ(魚捕海人部)^{いをさりあまべ}の約轉であらうと推定した次第である。

終りに尙一言附加へて置きたいことは、糸満人の體質及び性格に關することである。糸満人の鼻の高い理由はかうであらう。彼等は日に何度となく海中に飛込んで潜つた後に水面に浮び出で、其都度鼻腔内に充滿してゐる潮水を強く吹出す。或は指頭を以て強く鼻を撮んで出すこともある。これが日となく、月となく、一年中、一生涯も續く。のみならず子、孫と數代、十數代にも及ぶのであるから、鼻陵の高くなるのは必然的の結果であると考へる。餘り鼻と交渉のない農業生活を營んでゐる他の琉球民族が、これを見て、糸満人は西洋種子であると思ふのは寧ろをかしなことである。糸満人は鼻は高くても脊は白人の様に高くはない。又巨大なる體軀の者も容易に見出されない。一般南島人と同じタイプである。

糸満男子は腰部以下の發達がよくないと云ふ説も、彼等が小さな剝舟の中に膝を折つて端坐するからであると云へる。色赤く、毛赤き所以は云はずとも漁業生活のためである。又婦人の姿勢の端正なる理由は、男子の漁獲した魚貝其他の海產物を大笊に盛るゝ程入れて、これを頭上に載せ、分秒を争つて毎日二里餘の長途を急いで那霸の市場に往復して鬻ぐのであるから、自然胸を張り、腰を屈めて歩むやうになる譯である。氣質の荒々しいことや、迷信事の多いのも、其變化多き海上生活の影響であると見るべきである。又彼等が極めて利己主義者であるのも、其生業の性質によるものであることは疑ふことが出

來まい。人間が精神的にも肉體的にも職業の影響を蒙ることは今更呶々を要しないことである。何れにしても、木の葉のやうな列舟に身を托して、北は奄美大島より南は八重山に至るまでの漁業権を古來一手に掌握して山なす波濤を物ともせずに乘切る糸満人の勇敢なる氣象にはたゞ讃嘆の外はないのである。(昭和三年三月七日)

宮 良 當 壯